記紀･万葉プロジェクト基本構想

――「本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良」の確立に向けて――

平成 23 年 2 月

奈　良　県

――目　　次――

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

１．理念、目的、構想推進の基本的な考え方　・・・・・・・・・・・・・・・　2

２．構想推進にあたっての留意点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

３．事業計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

４．魅力項目(ストーリー・テーマ・ＰＲ項目)とその展開　・・・・・・・・・・・8

５．今後の検討課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

６．記紀・万葉プロジェクト検討委員会及び推進チーム会議　・・・・・・・・・12

はじめに

- 『古事記』『日本書紀』が編纂され、多くの万葉歌が詠われた奈良県。「記紀・万葉プロジェクト」は、これら記紀・万葉集に代表される歴史素材を活用した行政施策を効果的に展開し、「**本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良**」を確立するための取組みである。すなわち、歴史情報の発信手法や味わい方の提案力を磨き、本県ならではの歴史素材の多角的な紹介を通じて、成功裏に閉幕した平城遷都 1300 年祭がもたらした奈良への関心を持続させるとともに、さらに奈良の魅力を再発見して、県内外の人びとに発信していくプロジェクトである。

- 来たる平成 24(2012)年は『古事記』が完成して 1300 年、さらに平成 32(2020)年は『日本書紀』が完成して 1300 年という節目の年にあたる。奈良県では、この 2 つの節目の年をつないで、平成 24 年度から 9 年のスパンに及ぶ長期のプロジェクトにより、「日本の原風景」を思い起こさせる本県ならではの存在感を内外に強くアピールしていきたいと考え、「記紀・万葉プロジェクト基本構想」を策定するものである。

- 本構想の策定にあたっては、平成 22 年 2 月、県庁内に「記紀・万葉プロジェクト検討委員会」という部局横断的な連携組織を結成し、1 年間にわたり検討を重ねた。また、学識経験者や地元有識者に対する聞き取り調査を行い構想に反映した。

- 記紀・万葉集をはじめとする文献には、日本文化の源流につながる様々な記述があり、ゆかりの地は全国各地に存在する。それ故、「記紀・万葉プロジェクト」を端緒にして、奈良県のみならず日本列島の様々な地域の人びとの「自分たちの住む地域の魅力再発見」につながることを目指したい。皆が愛着を持ってふるさとのことを語るようになれば、日本はもっと豊かな国になるだろう。本プロジェクトの推進が、閉塞感漂う我が国を元気にするために本県として貢献できるものとなるよう取り組んでいきたい。

＊本構想では、「記紀・万葉」を「古事記、日本書紀、万葉集及び伝承に代表される歴史素材」を示す言葉として、古事記、日本書紀、万葉集という文献を示す「記紀・万葉集」とは区別して用いている。

１．理念、目的、構想推進の基本的な考え方

本プロジェクトの定義

- 「記紀・万葉プロジェクト」は、記紀・万葉集に代表される歴史素材を活用した行政施策を効果的に展開し、新しい時代に奈良県の存在価値を内外に示すとともに、「**本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良**」を名実ともに実現していくための取組みである。

- 本プロジェクトが目指す「**本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良**」の実現とは、長い年月をかけて受け継がれてきた県内各地の様々な歴史的遺産を、奈良県に住まい、あるいは奈良県を訪れる人びとにとって、その真価を十分に理解でき、感動を味わえるものとすることである。知らずに見ればありふれた草原や田畑にすぎない風景でも、その場所にまつわる歴史や伝承を知ったうえで見れば、そこに全く違う古代の風景が立ち現れてくるはずであり、その体験を通じて歴史に対する興味を深め感動を味わうことが、本プロジェクトで言うところの「**本物の古代と出会い、本物を楽しむ**」ということである。

目 標

- 「**本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良**」の実現のために、本プロジェクトでは以下の３つの目標を掲げる。

① 奈良県が歴史情報の発信のしかたとその味わい方の提案に関するリーダー的存在となる

――記紀・万葉集ほか古代史を中心とした歴史に関する情報を発信していく方法と、その味わい方についての提案力を磨き、全国の自治体の中でリーダー的存在になることを目指す。

② 歴史素材の多角的な紹介により、奈良県の魅力の再発見、地域の誇りの醸成につなげる

――豊富な歴史素材を多角的に紹介することにより、県内外の人びとがこれまでに知らなかった奈良県の魅力を発見するとともに、すでに知っていた歴史素材の違った面の魅力を知るようになり、それを通じて地域の誇りがさらに醸成されていくことを目指す。

③ 奈良県への誘客を促進し、顧客満足度を高める

――上記①②を通じて、魅力的と感じた歴史素材に触れることを目的に奈良県を訪れてみようという人が増え、またその満足度を高めることによってリピーター、さらには奈良ファンとなってもらうことを目指す。そのことは、奈良県の活性化や地域経済の振興に直結する。

事業構成の考え方

- また、本プロジェクトの事業構成を検討する際には、以下の２つの考え方で臨む。

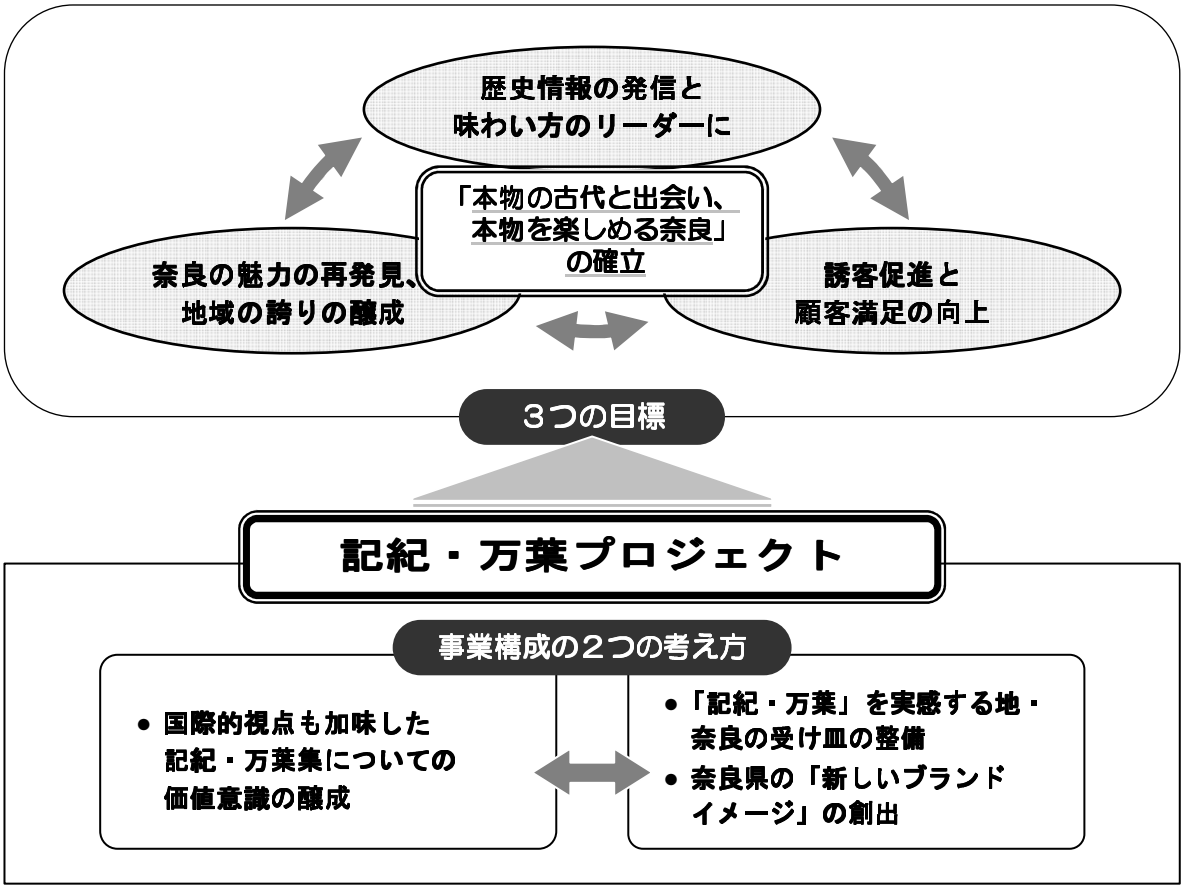
① 国際的視点も加味した『古事記』『日本書紀』『万葉集』についての価値意識を醸成する

――『古事記』『日本書紀』『万葉集』をはじめとする文献等について、歴史的・文学的視点のみならず、海外との文化交流など国際的視点も含めた様々なアプローチの可能性を探り、一般の人びとにとって親しみやすい情報を提供する。
それによって「記紀・万葉集は面白い」「記紀・万葉集を知ると日本の文化の源流がわかる」という価値意識が醸成されれば、自ずと記紀・万葉集の成立の地であり主要な舞台の１つである奈良県に対する一般の人びとの価値意識や関心も高まるはずである。

②「記紀・万葉」を実感する地・奈良の受け皿を整備し、奈良県の「新しいブランドイメージ」を創出する

――文献と県内関連スポット等を結びつける各種情報の集積・提供など、記紀・万葉集に触発されて奈良県を訪れる人びとの思いを充足させる各種事業を実施し、受け皿を整備する。
それによって多くの人が奈良県は「記紀・万葉で楽しむことができる」と評価し、できることなら奈良県で「記紀・万葉と暮らしたい」と思うようになれば、「記紀・万葉で楽しむ県」「記紀・万葉と暮らせる県」という奈良県の「新しいブランドイメージ」の創出につながる。

「３つの目標」と「２つの考え方」



本プロジェクトが目指す歴史素材の活用についての考え方

- 本プロジェクトでは、歴史を味わい楽しみ、歴史に触れるための歴史素材を下記の「３つの要素」に分類する。

  ① 文献・伝承 ―― 古事記、日本書紀、万葉集などの古文献、地域に伝わる伝承 等

  ② 現場・現物 ―― 古墳、社寺、宮跡、城跡、古道、遺跡、仏像、宝物、考古的出土物 等

  ③ 復元物　等 ―― 復元模型、復元 CG、復元鳥瞰図、復元建造物・庭園 等

- 「文献・伝承」「現場・現物」及び「復元物等」各々を業務対象として、観光情報の発信、発掘や修復、研究、復元展示計画の策定などの事業がすでに実施されている。しかし、３要素を個別それぞれに取り扱う業務のみの実行では、一般の方にとって生きた歴史の認識には結びつきにくく、より多くの方々に歴史の魅力を身近に感じていただくことにつながる施策の展開は検討しにくい。より身近に歴史を体感するにはこれら３要素への総合的なアプローチが必要である。

- 歴史の「現場」において想像図などの「復元物等」とともに、その場で歴史場面が展開された当時の生の記述としての「文献」の該当部分の情報を付与すれば、より実感のある生き生きとした奥深い歴史の追体験が可能となる。

- そこで、「記紀・万葉プロジェクト」においては、３つの要素すべてに関するソフト情報を収集、整理、調査分析し、総合的なテーマ付与手法を開発するものとする。

歴史を味わい楽しむための「３つの要素」

２．構想推進にあたっての留意点

- 行政の施策・事業において記紀・万葉集及びそれらの文献に代表される「歴史」を取り扱うに際しては、以下の４点に留意して臨むこととする。

①「歴史」と施策・事業などの取組みをつなぐ

――前記の３つの目標を達成するため、本プロジェクトでは歴史郷土情報を収集・調査分析し、発信のためのテーマ付与手法を開発して関係機関に情報提供し、「奈良県の歴史」と施策・事業などの取組みをつなぐ。

②「ニュートラルな立ち位置」を確保する

――記紀・万葉集は文学、歴史学、考古学をはじめ学術分野の重要な研究対象となっており、その解釈をめぐっては様々な議論がある。また、かつて皇国史観による国威発揚に用いられた経緯もあって、第二次大戦後は、特に記紀については広く一般の人びとに親しまれるものであったとは言えず、今日もなお新しい時代における位置づけが十分確立されているとは言えない。したがって、行政として記紀・万葉集を扱う際には、特定の考え方や学説に偏ることなく、それぞれの論拠や出所、発信者等を明らかにして、ニュートラル(中立的)な立ち位置から、諸説の並列的・列記的発信を行うよう努める。

③「多様な視点」からの情報発信を行う

――研究者、ボランティアガイド、県・市町村職員、子どもなど、様々な人にそれぞれの視点からどのように奈良を「好きか」、どのように記紀・万葉を「楽しむか」を語ってもらうなど、多様な視点からの情報発信手法を工夫する。

④ 学術研究機関との「人的ネットワーク」を構築する

――奈良県は我が国の歴史や文化財に関する大学・研究所、博物館等の学術研究機関が集積する国内有数の地であり、それぞれの専門分野におけるグローバルな学術ネットワークの結節点でもある。歴史を活用した取組みを推進していくうえでこれら学術研究機関との連携は不可欠であり、本プロジェクトの推進を通じて、関連する学術研究機関の専門家と行政職員や民間事業者等をつなぐ「人的ネットワーク」を構築し、質の高い情報集積を図るとともに、専門知識を活かした施策・事業の充実に努める。

３．事業計画

計画期間

- 平成 24(2012)年は『古事記』が完成して 1300 年、平成 32(2020)年は『日本書紀』が完成して 1300 年にあたり、これら２つの節目の年をつないで、９年に及ぶ長期のスパンでプロジェクトを展開する予定である。

- なお、各年度の事業については、①情報収集・整理、②魅力項目(ストーリー・テーマ・ＰＲ項目)の抽出、③魅力項目を伝え味わうしくみの造成、④ターゲットに応じた情報発信 という「４つのプロセス」を意識しながら検討していく。

- また、年度ごとに収集・発信する情報のカテゴリーやターゲットを変えて飽きられない工夫をするとともに、情報の集積とＰＲ手法の開発及びその集積により、歴史情報の集積・発信において我が国のリーダー的存在になるという目標を念頭において、長期的視点での事業展開を行う。

平成 23 年度事業

- 平成 23(2011)年度は、県内外に対するシンポジウム・フォーラムの開催等の情報発信事業を中心として、有識者・研究者からの聞き取り調査等幅広い関連情報の収集と整理を進め、県が主体となって推進する「記紀・万葉」関連事業の方向性と考え方を確立する。併せて、奥深い情報の蓄積による本県の歴史的な強みを存分に引き出すための下地を醸成していく。

平成 24 年度以降の事業

《平成 24 年度》

- 古事記完成 1300 年目の年である平成 24 (2012)年度には、平成 22、23 年度において蓄積した情報と確立した方向性をもって、各種主体が幅広い「記紀・万葉」素材を活用し、本格的な事業展開を図るべく、今後も引き続き事業メニューについての検討を行う。

《平成 25 年度以降》

- 平成 25(2013)年以降は、平成 32(2020)年を視野に入れた長期的な事業展開を意識しながら、前年度までに収集した情報を次年度の発信事業に活かすという考え方に基づき、年度ごとに実施すべき事業を検討する。

「記紀・万葉プロジェクト」推進の４つのプロセスと長期的展開戦略

◆古事記完成1300年（2012年）と日本書紀完成1300年（2020年）をつなぐ長期プロジェクト。
◆年度ごとに、① ～ ④の「４つのプロセス」を意識して事業を検討。
◆各年度で情報カテゴリーやターゲットを変え飽きられない工夫をするとともに、
情報の集積とPR手法の開発・集積においてリーダー的存在になることを目標に、
長期的視野に立って事業を展開。

４つのプロセス

素材：記紀・万葉集及び伝承についての関連文献（テキスト）
ヒト、モノ、コト、場所、エピソード・・・

① 情報収集・整理（情報のデータベース化、一元管理化）

●記紀・万葉及び伝承関連データベースの一元管理

（例示）
○古墳・陵墓　○民俗資料・考古資料(出土品)　○地域伝承
○万葉歌碑　○万葉花　○民俗芸能
○ゆかり地(社寺、城、地名・・・)　・・・・・

② 魅力項目（ストーリー・テーマ・PR項目）の抽出（ターゲット別の項目の抽出を含む）

おもしろさ、魅力の創造、新たな切り口の発見

③ 魅力項目を伝え味わうしくみを造成

- **③-A 地域再発見のためのしくみ**
  （検討例）
  ・遠足モデルルート造成
  ・・・・・
- **③-B ツール作成**
  （検討例）
  ・ガイドブック・パンフレット
  ・ルートマップ
  ・ホームページ
  ・・・・・
- **③-C イベント企画**
  （検討例）
  ・シンポジウム
  ・多府県連携フォーラム
  ・展覧会
  ・・・・・
- **③-D その他**
  観光事業以外への歴史情報の活用
  ・・・・・

④ それぞれのターゲットに応じた情報発信

一般向け、民間事業者向けに、それぞれのターゲットに応じた情報を発信

当プロジェクトの目的

記紀・万葉及び伝承を切り口として下記の実現を目指す

- 本県が歴史情報やその味わい方提案力のリーダー的存在となる
- 地域の誇りの醸成
- 奈良県への誘客の促進

長期的視点での事業展開

2010年度	2011年度	2012年度	2013年度～	2020年度
計画策定	万葉文化館10周年 プレ年事業実施	古事記完成1300年 事業実施	図書情報館10周年(2015年) 橿原考古学研究所80周年(2018年)	日本書紀完成1300年 事業実施？

① 情報収集・整理
- 基礎調査：・どんなデータがどこにあるか　・どんなカテゴリーがあるか　・文献の分析
- ・データベース構築計画策定
- データベース化：（例示）・地域伝承　・古事記ゆかり地　・万葉歌碑　・古代植物
- （例示）・民俗芸能
- 年度ごとにカテゴリーを変えてデータを収集、各種データを一元的データベースに集約する

② 魅力項目
- テーマ発見　モデル的ルート設定
- PR項目抽出　ルート化、テーマ化
- 歴史や古代を味わうための「項目情報」を集積する

③ 魅力項目を伝え味わうしくみを造成
- 職員向け記紀万葉基礎知識集の作成・配布
- シンポジウム・フォーラムの開催・PRツール・ホームページの作成
- 記紀・万葉をテーマとした各種事業の集中実施
- （例示）地域伝承をテーマとした各種事業の実施
- 収集したデータを次年度以降の事業に活用する

④ 発信
- 発信：県庁職員
- 発信：歴史愛好家など
- 発信：すべてのターゲット
- 発信：（例示）県内若年層
- 年度ごとに異なるターゲットを設定、事業の力点に変化をつける

当プロジェクトの目的
- 職員が記紀・万葉に親しみ、楽しむマインドを持つ
- 特に古代史・万葉に関心の高い層の満足度が向上する
- 一般の人々の記紀・万葉への関心が高まり、来県者が増える
- （例示）県民が地域の歴史に関心を持ち、地域の魅力を再発見する

古代の歴史情報の集積・発信リーダーを目指す

飽きられない工夫

４．魅力項目（ストーリー・テーマ・ＰＲ項目）とその展開

- 「記紀・万葉プロジェクト」では基幹業務として、歴史素材に関する情報の収集・調査分析とともに、「文献・伝承」「現場・現物」「復元物等」という３つの要素を複合化・総合化し、一般の人びとにわかりやすい魅力的な歴史情報として発信するための「テーマ」付与手法の開発を掲げた。そこで、「記紀・万葉」から引き出すことができる「魅力的なテーマ、ＰＲするに値するストーリー」を「魅力項目」と名づけ、テーマ付与手法開発にかかる業務の一環として、聞き取り調査などを通じて、歴史素材の中から「魅力項目」を抽出する作業を行っていく予定である。

- プロジェクト推進の「４つのプロセス」では第２番目の工程に相当する、こうした「魅力項目」を抽出する一連の作業を通じて、これまで無関係と思われていた歴史と各種施策等を結びつけることにより、様々な歴史素材を活用した新しい切り口での「歴史を味わう」事業や取組みの展開が可能になると考えられる。

- 次ページに記紀・万葉集及び伝承についての「魅力項目」を例示したが、これは平成 22 年度に実施した作業の成果をいったんとりまとめたものである。歴史を活用した事業や取組みを考える際の手がかりとして、どのように歴史を味わうかという「味わいの方向」を「登場人物に焦点を当てる」「古道・故地を訪れ散策する」「原典に触れる」「五感で味わう」「古代の謎を楽しむ」という５つに整理し、それぞれについて「魅力項目」を例示した。

- このほかにも「謎解き」「食べもの」「恋物語」といった、記紀・万葉集や奈良県の歴史について予備知識がない人びとにも興味を持ってもらえるようなストーリーの「軸」を発見しながら、「魅力項目」を豊富化していくことが望まれる。さらに、将来的には記紀・万葉集に代表される古代史以外の多様な歴史情報についても収集・分析し、より幅広い歴史の味わい方を発見・紹介していくことが課題となる。

- なお、「魅力項目」を活用した事業展開例として、章末に「旅行商品化に向けてのモデルコース提案書(記紀のみち)」を掲げた。

味わいの方向と魅力項目

味わいの方向		魅力項目（例）
■ **登場人物に焦点を当てる** （ストーリー化、キャラクター化を図る）	**◆記紀・万葉集は個性的な人物（神々）が次々と登場するオムニバスの「人間ドラマ」。面白いストーリーの中心にはいつでも魅力的な人物がいる。** ・登場人物の世代や容姿、性格、身分、生い立ちなども様々で、文献のわずかな記述やエピソードを手がかりにして自由に人物像を造形し、イメージを膨らませることができる。 ・親子、夫婦、恋愛、友情、仕事などをテーマにした現代にも通じるエピソードが満載されており、人間関係をめぐる喜怒哀楽は現代人にも共感を得やすい。 ・記紀・万葉集の編纂も１つの歴史ドラマであり、編纂に携わった人物たちを通して、当時の政治状況や国際情勢が垣間見える。	○帝王学の教科書編纂者・太安万侶と多氏 ○謎の暗誦者・稗田阿礼 ⇒例① ○さすらいの英雄・ヤマトタケル ○万葉第一の才媛・額田王 ○「王佐の才、帝王の器、母の徳あり」持統天皇 ○「飛鳥の母」斉明（皇極）天皇 ○古代の国際交流官・小野妹子と粟田真人 ○理想の聖人像・聖徳太子「豊聡耳伝説」 ○貧困や老いを見つめた社会派歌人・山上憶良
■ **古道・故地を訪れ散策する** （ルート化の可能性を探る）	**◆歴史上のドラマには必ず舞台となった場所がある。記紀・万葉集に魅せられ、ゆかりの地をめぐって諸国を旅した先人たちがいる。** ・記紀・万葉集の時代にもレクリエーションや商売、戦争など様々な理由で人は各地を移動している。現存する古代の道や遺跡・遺物、地名、石碑や案内板等を手がかりにして、登場人物の足取りをたどり歴史上のドラマを追体験することができる。 ・古来日本人の旅の中心には「歌枕」があり、その原点に記紀・万葉集がある。残された旅行記を指南書として先人の足跡をたどれば、先人たちの目を通して、古代から現代まで積み重ねられてきた記紀・万葉集ゆかりの地をめぐる旅の面白さ、奥深さを発見できる。	○大和の古代道路・山の辺の道を歩く ○「歴代遷宮」を追って宮跡めぐり ○江戸期の記紀・万葉学者・本居宣長の歩いた道 ○「石と水の都」を訪ねる（巨石、奇石…）
■ **原典に触れる** （虚心坦懐に、まず読んでみる）	**◆記紀・万葉集をはじめ現存する日本の古典は、後世に伝えたいという強い意志をもって、口承や書写によって人から人へと伝えられた。** ・奈良時代につくられた記紀・万葉集の原本は残っておらず、今日伝わるのはいずれも後世の写本もしくは版本である。文字や構成の異同からは、伝え手の考え方や時代的背景が読み取れる。 ・記紀・万葉集はいずれも漢字を用いて表記され、漢文と万葉仮名が併用されている。原典を見れば、中国語を使って日本語を表記しようとした先人たちの試行錯誤や古代日本語の発音を知ることができる。	○声に出して読みたい記紀・万葉 （書出し、クライマックス、名文、名歌…） ○古事記と日本書紀を読み比べる ○語り部が伝える記紀・万葉 ○古代歌謡を歌う（記紀歌謡、朗詠…） ○古写本を展観する
■ **五感で味わう** （記紀・万葉の世界に身をおく）	**◆古代の人びとも同じ自然や風土の中で生きていた。記紀・万葉集の中には現代と変わらない風景や人間の営みがある。** ・「大和は国のまほろば」と謳われた大和盆地の風景、神々の住まうとされる山川草木、四季の移ろいと花鳥風月など、言葉で表現されているものを、今でも実際に目で見、耳で聞き、身体で感じることができる。 ・記紀・万葉集の中には衣食住や習俗など古代の人びとの生活を知る手がかりが散見され、現在行われている寺社や地域の行事や祭り、風習の中にもその痕跡を見出すことができる。	○国見スポットで大王気分 ○古代のパワースポットで元気をもらう ⇒例② ○近代絵画に見る記紀・万葉の世界 ○民話や芸能の中の記紀・万葉を楽しむ （神楽、鵜飼…） ○古代色の花、万葉植物に出会える場所 ○古代食、郷土料理等食文化を味わう
■ **古代の謎を楽しむ** （論争をレビューする）	**◆記紀・万葉集をめぐっては、古来、学者から庶民まで巻き込んで幾多の論争があった。現代まで決着がついていないテーマも少なくない。** ・古代の事象については参考となる資料が乏しく、現存する遺跡・遺物や習俗などから総合的に類推するしかない部分が大きい。その分専門外の人にとって敷居が低く、永遠に解けない謎としてのロマンがある。 ・近年の発掘調査により考古学分野で新たな発見が相次いでいる。そうした研究成果を踏まえて論争を見直すことにより、これまでと違った観点からの議論の展開が期待できる。	○邪馬台国畿内説・九州説合戦 ○天孫ニニギはどこに降臨したか？ ○渡来人がもたらした学術・文芸（東漢氏・秦氏…） ○アジアの創世神話を比較する （騎馬民族的、南方的…）

魅力項目と関連する歴史素材（例）

例①―謎の暗誦者・稗田阿礼

〈ここが魅力〉 語り部 記憶力 謎解き

・稗田阿礼は、歴史書編纂に際して宮廷に召し出され、『帝紀』『旧辞』を誦習・口述した舎人（下級役人）。古事記はこの人物の口述を太安万侶が筆記したものとされる。

・「一度見た文章は暗誦でき、一度聞いたことは忘れない」超人的な記憶力を持つ。28歳のとき天武天皇から誦習した記憶を元に、三十有余年後に古事記の編纂が行われた。

・資料に乏しく、生没年も不詳。架空の人物とする説や、他の歴史上の人物・集団のペンネーム説もある。天岩屋戸伝説で活躍するアメノウズメの子孫とされ、女性説も有力。

〈関連する歴史素材〉

○賣太神社　○稗田神社（兵庫県）　○記憶力大会（大和郡山市）
○阿礼祭り（賣太神社）○阿礼女性説（平田篤胤、柳田国男、西郷信綱など）
○阿礼=藤原不比等説（梅原猛）○稗田阿求（ゲームキャラクター）etc.

例②―古代のパワースポットで元気をもらう

〈ここが魅力〉 ご利益 入門編 完成されたハード＆ソフト

・パワースポットとは、神の気配や自然のエネルギーを感じられる場所。社寺や古墳、山や滝、巨石・巨木など自然信仰と結びついた古くからの霊場・聖地が、心身にパワーを与える場所として、近年若い世代を中心に再評価されている。

・その場所や事物にまつわる伝説・伝承が、健康長寿や恋愛成就、開運などの「ご利益」につながっている場合が多く、神話や伝承に親しむための入門編として最適である。

・古来霊場・聖地とされてきた場所では、精神的な充足感を得るためのハードやソフトが長い年月をかけて整備されており、お守り等のグッズ類なども充実している。

〈関連する歴史素材〉

○石上神宮　○大神神社　○天河大弁財天社　○玉置神社　○安倍文殊院
○春日大社　○吉野山、三輪山、二上山　○石舞台古墳　etc.

「魅力項目」を活用した事業展開例：旅行商品化に向けてのモデルコース提案書

記紀・万葉モデルコース　飛鳥・藤原京から平城京へ　古事記・日本書紀の編纂を旅する【記紀のみち】　　季節：通年

現存する我が国最古の歴史書「古事記」「日本書紀」（以下両書を「記紀」と略称）。平城京の時代である、712年に古事記、720年に日本書紀が完成しました。記紀編纂の事業はそれを遡ること約半世紀、飛鳥に宮があった時代、天武天皇により着手されたことが記紀に記されています。

飛鳥・藤原の宮都、古事記撰録者である太安万侶ゆかりの「多神社」、古事記の語り部「稗田阿礼」ゆかりの賣太神社、そして平城京へと記紀編纂の道をたどれば、記紀の文面には記されない奥深い歴史の真実に出会うことができるかも知れません。

平城宮跡
平城京が営まれた時代、712年に古事記、720年に日本書紀が完成しました。

太安万侶（おおのやすまろ）墓
古事記編者、太安万侶の火葬墓。昭和54年1月に墓誌とともに発見されました。

平城京羅城門跡
都の玄関口である正門跡。平城京朱雀大路の南端に羅城門がそびえていました。

賣太（めた）神社
天武天皇の命を受けて様々な物語を誦み習ったとされる稗田阿礼をまつります。

多坐弥志理都比古（おおにいますみしりつひこ）神社
太安万侶をはじめとする多一族ゆかりの神社です。安万侶もまつられています。

藤原宮跡
天武天皇の意志を受け継ぎ、持統天皇が完成させた日本初の本格的な都城です。

橿原考古学研究所附属博物館・太安万侶墓誌
奈良市田原で発見された太安万侶の墓誌（現物）が展示されています。

飛鳥浄御原（あすかきよみはら）宮跡（伝飛鳥板蓋宮跡）
壬申の乱に勝利し天武天皇が即位した宮。ここで記紀編纂事業が開始されました。

下ツ道（しもつみち）
奈良盆地中央、真南北に敷設された古代の幹道。道幅は25mもありました。

レンタカー・タクシーを利用したコース構成です。

1日目

記紀・万葉集の舞台となったうるわしき大和風景・日本の原風景を満喫

東京駅 08:00発 → 新幹線 → 京都駅 → JR・近鉄 → 近鉄・JR 奈良駅 11:00着

京都駅 → 近鉄 → 橿原神宮前駅 11:30着

1日目はお好みのコースを選択

国のまほろば大和の記紀・万葉散歩 【「山の辺の道」】

石上神宮

古道風景 山の辺の道

万葉歌碑 三輪山

など…

秋津洲（あきつしま）大和の記紀・万葉散歩 【「葛城古道」「當麻の里」】

葛城山

一言主神社

土俵 相撲館

など…

宿泊（橿原市・桜井市・明日香村周辺） 17:00

2日目

飛鳥の宮跡から平城宮跡へ　記紀成立に至るルートを旅します

宿泊（橿原市・桜井市・明日香村周辺） 08:00発

- 朝の「飛鳥」の風景を満喫 奥飛鳥・朝風峠など
  「采女の袖吹きかへす明日香風」万葉の時代と同じ風を感じます
- 飛鳥浄御原宮跡 ＋ 周辺 09:00着
  徒歩散策
  周遊歩道は雰囲気抜群 明日香村散策に最適
  徒歩散策90分
- 20分
- 藤原宮跡 30分
  我が国最初の本格的な都城 宮跡で持統天皇に思いを重ねて
- 70分 ※途中昼食
- 橿原考古学研究所附属博物館 60分
  太安万侶墓誌の実物を見学
- 20分
- 多坐弥志理都比古神社 30分
- 20分
- 賣太神社・稗田環濠集落 30分
- 20分
- 羅城門跡 20分
  真北を見れば平城京の朱雀門と大極殿が重なります
- 10分
- 平城宮跡 50分
  平城京の時代を迎え、古事記・日本書紀は完成しました 旅の終わりに、古事記序文を朗読してみてはいかがでしょう
- 10分
- JR・近鉄 奈良駅 17:00着 → 京都駅 → 東京駅

（※時間は目安です。）

５．今後の検討課題

- 今後の構想推進にあたっては、県、市町村はじめ行政関連諸機関はもちろん、企業、地域団体など多様な主体の参画を促し、県民が主役となって様々な事業を企画・実施するとともに、全県・全国で本プロジェクトを盛り上げていこうという機運を醸成する必要がある。

- そのために、平成２４年度以降の事業展開に向けての検討課題として以下の４点を挙げておきたい。

① 市町村、地域団体との連携

――本プロジェクトを推進し、地域の歴史情報を収集・発信していくうえで、県内各市町村や地域団体等との連携は不可欠である。県と地域との情報交換はもちろん、各市町村や地域の各種団体・個人のネットワークづくりに協力することを通じて、より効果的で質の高い情報収集・発信につなげたい。

② 記紀・万葉集にゆかりのある他府県との連携

――記紀･万葉集の舞台は奈良県だけではなく､ゆかりの地は国内外の各地に広く分布している。古事記編纂 1300 年に向けて「神話のふるさと『島根』推進事業」に取り組んでいる島根県をはじめ、記紀・万葉集に関わりの深い他府県と連携し、共同企画や共同キャンペーン等による相乗効果を狙いたい。

③ 部局横断型組織による庁内ネットワークの強化

――長期にわたる効果的なプロジェクトの実施のためには、関係諸機関との円滑な連絡調整が不可欠である。関係機関との緊密な情報共有関係を構築していくため、平成 22 年２月に設置された部局横断型の連携組織である「記紀・万葉プロジェクト検討委員会」を中心に、庁内ネットワークの一層の強化に努める。

④ プロジェクトの「キャッチフレーズ」等の検討

――本プロジェクトの趣旨を一般の人びとにわかりやすく伝えるために、記紀・万葉集に由来する言葉や奈良県の歴史を連想させるキーワードを用いて､「奈良は日本の上流にさかのぼります」「奈良・大和まるごとまほろば楽土」等、覚えやすく口ずさみやすい「キャッチフレーズ」の設定を検討する。併せて、親しみやすいロゴマークやキャラクター等を用いた効果的なプロモーション活動の適否についても継続して検討する。

６．記紀・万葉プロジェクト検討委員会及び推進チーム会議

● 本構想の策定にあたっては、平成 22 年２月に県庁内の推進機関として「記紀・万葉プロジェクト検討委員会」及び同委員会の実務組織である「記紀・万葉プロジェクト推進チーム会議」を設置し、調査・検討を行った。なお、同検討委員会及び推進チーム会議については、平成 23 年度以降も引き続き本プロジェクトの推進にかかる調査・検討にあたる予定である。

記紀・万葉プロジェクト検討委員会・検討委員及び顧問

（平成 23 年１月 31 日現在）

役　職	所　属	職・氏名	
座　長	文化観光局	局　　長	廣野　隆信
検討委員	文化観光局	次　　長	寺田　　豊
	観光振興課	課　　長	森藤　勝彦
	奈良県ビジターズビューロー	参　　与	三浦建史郎
	ならの魅力創造課	課　　長	村上　伸彦
	国際観光課	課　　長	奈良　和美
	文　化　課	課　　長	稲村　和子
	万葉文化館	業務部長	森川　和昭
	図書情報館	副 館 長	尾登　政司
	農　林　部	次　　長 （耕地課長事務取扱）	前田　健次
	土　木　部	次　　長 （企画管理室長事務取扱）	清水　義則
	教育委員会　文化財保存課	課　　長	石川　幸司
	教育委員会　橿原考古学研究所	副 所 長	前田　智子
顧　問	万葉文化館	館　　長	中西　　進
	図書情報館	館　　長	千田　　稔
	橿原考古学研究所	所　　長	菅谷　文則

記紀・万葉プロジェクト推進チーム会議・チームメンバー

（平成 23 年１月 31 日現在）

役　職	所　属	職・氏名	
リーダー	ならの魅力創造課	課長補佐	谷垣　裕子
メンバー	観光振興課	主　　査	杉村　和彦
		主任主事	大西　洋亮
	ならの魅力創造課	調 整 員	上村　乃太
		主　　査	石田　昌史
	国際観光課	主　　査	野田　康彦
	文　化　課	主　　査	森本　　理
	万葉文化館万葉古代学研究所	主任研究員	井上さやか
	図書情報館	調 整 員	乾　聰一郎
	農林部企画管理室	係　　長	吉田　和嗣
	耕　地　課	主　　査	山﨑　克典
	道路・交通環境課	主　　査	松田　拓士
	橿原考古学研究所	埋蔵文化財部長	西藤　清秀
		総括研究員	今尾　文昭